

# いしづみ 良心の碑

## 聖書の言葉

「たとえ、人間の不思議な言葉、天使の不思議な言葉を話しても、愛がなければ、わたしは鳴る銅鑼、響くシンバル。たとえ、預言の賜があり、あらゆる神秘、あらゆる知識に通じていても、たとえ、山を移すほどの完全な信仰があっても、愛がなければ、無に等しい。」(コリントの信徒への手紙一 13章1節～2節)

新約聖書の中には、愛について語られている箇所が幾つかありますが、その中でもこの箇所は決定的な強さをもっているのではないのでしょうか。朗読 半田 久

## 5月 月例会

日時 5月23日(火) 2時～4時  
発表者 支倉 清  
テーマ 新島民治「弟子衆名前控」

## 師弟は一生続く身分関係

新島民治(新島襄の父)は18歳で安中藩手習所(寺子屋)の師匠となり44年間に346人の筆子(弟子)を教育した。当時師匠と弟子の関係は一生つづく身分関係と認識された。

## 男子も女子も、町人の子も他藩の子も

民治の『弟子衆名前控』には安中藩邸内の子どもだけでなく、商人の子や他藩の子も記載されている。藩や身分、男女の壁を超えて、各手習所が地域の子供等に初等教育を施したようである。

## 教育はボランティア

手習所や藩校には基本的に入学金、授業料という観念がなかった。民治の手習所では入門時に鯉節、扇子、酒などを受け取り、盆と暮れに金1朱(5000円)程度の御礼を受け取った記録が残っているが、それは



現在の「お中元」「お歳暮」の感覚に近い。

## 弟子超満員

天保10年は入門者が14人。その中には民治の長女(くわ)と次女(まき)も混っていた。手習所に5年ないし6年通うので、民治の寺子屋はこの年弟子数が50人ないし60人になったはずである。しかし、先生は民治ひとりだけであった。

## 江戸城明け渡し直前まで手習所を開く

慶應4年正月鳥羽伏見の戦いが始まった。新政府は慶喜追討令を発し、江戸に向けて進軍を開始した。江戸の各藩邸から国元への避難が始まったが、民治は子供等を見捨てて安中に引き上げるわけには行かなかったであろう。江戸城明け渡しの直前まで民治は手習所を閉鎖しなかった。

## 手習所に競争ない

江戸の教育には他人と比較して優・良・可、甲・乙・丙などと評定することはなかった。試験もなかった。弟子に序列を付けることもなかった。修業年限、卒業などの観念もなかった。知識の習得よりも、人間性を高めること(嘘をつかない、約束を守る、礼儀正しくする、卑怯なまねはしないなど)に重点が置かれた。

幕末、身分制度が揺らぎだすと、教育の世界に競争が採り入れられるようになる。

新島先生の足跡を訪ねる山中湖旅行  
中型バスをチャーターしました。現在参加予定者15名です。もう4、5名の参加を期待しています。

申し込み締切は5月31日(水)です。  
(文責：支倉清 写真：江澤香)



▲司会進行 佐々木博子

## 6月 月例会

日時 6月6日(火) 1時受付開始  
午後1時30分から4時  
会場 同志社大学東京オフィス  
内容 研究発表会(旅行の事前研究会)  
テーマ 新島襄と徳富蘇峰  
発表者  
木原康博「新島襄と徳富蘇峰」  
近藤恒雄「同志社時代の徳富蘇峰」  
上中一樹「山中湖双宜荘と熱海晩晴草堂の謎」  
福間 宰「大ジャーナリスト徳富蘇峰」  
村木文明「蘇峰の同志社墓地墓参」  
司会 坂本恵子・江澤香  
受付 大石道子・八戸奎子・小林悦美  
聖書 片桐 陽 祈禱 小崎敬子  
写真 村木文明・木原康博

憲 大学に入学した1960年代後半、アーモスト館長オーテス・ケーリ先生(1921-2006)は既に文学部英文学科の人気教授だった。加えてもらった「米國文化史」講座は、学生を十分に興奮させた。同時に、先生が第二次大戦中にハワイにあった米軍の捕虜収容所で多くの日本人兵に接していたことなども学んでいった。当時のことは自著『真珠湾収容所の捕虜たち』に詳しい。

今回、没後の2006年4月に米ロサンゼルス・タイムズ紙に掲載された先生の評伝を読

む機会を得た。大半が大戦中の収容所についてで、同僚のドナルド・キーン氏の「ケーリ氏は出身地を尋ねられた時、マサチューセッツと答えるのが苦痛だったと言っていた」という談話からは、先生の微妙な立場がうかがえた。

捕虜たちとの新たなつながりも見つけることができた。アーモスト館で戦後、長年にわたり管理人を務めた中野勇氏もハワイで収容されていた海軍将校の1人で、先生が戦後、中野氏がこの職に就くのを手助けしたのだという。同紙は「ケーリ氏の

おかげで父の人生は変わった」との子息の言葉を伝えている。もうひとつ、米メリーランド大学が1981年5月、ケーリ先生から聴き取ったオーラルヒストリープロジェクトにも巡り合った。小樽での少年時代やアーモスト大学での生活、戦争中の思い出のほか、終戦直後に東京のGHQ本部で偶然にマッカーサー将軍とエレベーターに乗り合わせたという思いがけないエピソードもあった。

先生は同名の祖父オーテス・ケーリ先生(1851-1932)についても語っている。祖父の先生が

新島襄と同じアーモスト大学、アンドーヴァー神学校出身で、岡山で布教活動に携わり、同志社で教授を務めたことはよく知られているが、孫の先生によると、祖父は神学校を終える時、布教の地として「アフリカ、もしくは日本」を希望し、アメリカン・ボードが日本派遣を決めたそう。この時、アフリカ行きが命じられていれば、日本、そして同志社との接点は生まれず、われわれが孫のケーリ先生に同志社で出会うこともなかったかもしれない。

(福間 宰)